

續 宗 達 雜 考

田 中 喜 作

の一二の疑問を提起したいと思ふ。

今日引く一般的な意味に於て宗達繪として品鑑されて居る多數の作品中、其の款記と印影とによつて左の五種に區別される。

一、法橋宗達の款記に對青かと思はれる小圓印（直徑凡六糎三）を鈐せるもの

二、法橋宗達の款記に對青軒大圓印（直徑凡七糎七）を鈐せるもの

三、宗達法橋の款記に對青軒大圓印を鈐せるもの

四、款記なく、伊年圓印一顆を鈐せるもの（伊年圓印にまた直徑五糎九のものと、四糎九のものと二種がある）

五、款印共に見ざるもの

以上の外、尙一般的には二種の伊年白文方印を有するもの、及び宗達法橋の款記に伊年圓印を見るもの等も亦宗達繪として品鑑されて居るが、前者は明かに喜多川相説に關聯して考ふべく、後者は容易に是れを偽倣の作として品定し得るがために、今其れ等の遺品に及ばない。また上記五種の何れにも、各それの偽倣の作品があると共に、伊年印の畫蹟中には、此の巨匠の流系の畫人が世代を追

再び此の想像の當否を檢覈し、併せて是れを一層具體化すべき義務を果さなければならぬと共に、一步を進めて所謂宗達繪に關する他

一

本誌前々號に於て、自分は『宗達雜考』一篇を草し、此の江戸初世の一巨匠に關する在來の記傳が、何れも容易に信じ難きを説き、其の源因が一面に彼の閱歷に關して根本資料と目すべきものも無く、漸く一世紀に近い享保に至つて、初めて畫傳の著録する所となつたに過ぎない點にあらうと想像した。尙、爾來多數の記傳は何れも殆んど不確實な推定を材として、互に採録せるさへあるに、是等が多年に互つた結果は、また互に出入し離合して、殆んど收拾すべからざるに至つて居ることを説き、寧ろ在るがまゝの法橋宗達到還元すべきを唱道した。其の上嘗て品鑑し得た一畫蹟と多少の文獻とを基礎として、漫に宗達二世或は宗達三世すらの存在を想像して、初世宗達の記傳を一層混亂させた因由が、こゝにもあらうことを推論した。今、自分は今日に遺存せる多數の所謂宗達繪を概觀して、

ふて下る間に、或は宗雪の如き、また或は相説の如き、二三の畫手に出でた作品の多數を包容して居ることに依つて、自分は今姑く其れをも考慮の外に措いて、先づ宗達の款記を有せる作品に就いて考へて見ることにする。

二

自分は本誌第二號圖版解説欄に於て、宗達繪中の法橋宗達の款記と、逆に宗達法橋とする此の二種の款記に就いて言及し、後者の如く自己の名或は雅號の下位に僧位を署することは、一人稱的には殆んど其の遺例を見ないことを注意したことがあつた。事實、我々は法橋宗達の如く、法橋位を自己の名或は雅號の上位に附して自署することは、平安朝以來の記録中に毎に目睹するに反して、此の上下を轉じて宗達法橋とする如き遺例は、三人稱としての場合に限られて居ることを知つて居る。最近三成重敬氏の談として聞いた所に依ると、古文書中にも此の種の遺例は絶對に發見しないと云ふことであつた。是れは單に常識より云ふも然るべきで、此の畫匠の正筆として何人も異論なき毛利家藏西行物語繪卷に、烏丸光廣が跋記して『命于宗達法橋令模寫焉云々』としたことが肯がはれると共に、また宗達が醍醐寺藏、舞樂圖屏風（對青小圓印を鈐する）岩崎家藏、關屋藩標圖屏風（對青軒大圓印を鈐する。本誌第十號參照）等の疑問の餘地なき作品に、法橋宗達の款記を加へたことも當然のことである。それにも拘らず一面に宗達法橋の款記を有する多數の作品が我々の周圍に遺存

する。嘗て史家の一人は彼が此の『くだけた署名ぶり』を見せた所にも、竊かに彼の面目を語ることを説かれたことがあつた。此の解釋は彼を『京の遊人』（前々號參照）とする所傳に想到して、我々にとつて最も興味の饒かなるを覺えるものがあるが、然し彼がたとひ、當代畫壇の位置に於ては、市井の一畫徒に過ぎなかつたと想定すべき根據があるにしても、何等かの事由に依つて法橋位を贏ち得た彼である。其の上當時の禁中に多才を以て聞え、文辭に長けた烏丸亞相に親昵を得て居た彼として、時に法橋宗達と署し、また時には彼を外にして他に全く其の用例を見ない宗達法橋の署名をしたことは、我々にとつて多少の疑念を拂ひ得ない。有體に云へば自分は此の二様の款記にこそ、二人の宗達が竊かに世の耳目を聳晦せるものであらうと考へて、他年此の問題を解決することに惱まされたものであつた。理由は畫蹟そのものの上にも在る。

大體今日の史家の間に、十目の等しく鑑して彼の正筆とし、些かの異見なき作品は法橋宗達の款記を有する上記舞樂圖及び關屋藩標圖の外、他には建仁寺藏、風雷神圖二曲屏一雙、醍醐寺藏、扇面散圖二曲屏一雙（前々號參照）の如き無款の作品と、西行物語繪卷等がある。而して是等のうち最後の一點を除いては、他は何れも濃麗重厚の金碧の作品である。また是等の諸作品に次いで、彼の遺品として品第されるものに益田家及び團家藏伊勢物語圖帖（無款）養源院襖杉繪（無款）等があるが、是等が何れも亦等しき畫體を有する作品である。夫れにも拘らず宗達法橋の款記を見る多數の作品は、殆んど全部枯淡なる水墨畫であると云ふも過言ではない。たゞ僅に是れある

は、前々號所載の酒井正吉氏藏、蓮池馬回圖の伊年圓印を鈐せるものである。のみならず此の蓮池馬回圖の心にくきまでの畫意と、輕雋素朴な用筆とは、たとひ他の金碧の障屏畫が、其の企畫に應じて、裝飾的濃麗の畫體を有して居るにも拘らず、其處には尙多分の共通點を有せることを觀取する。特に其の素直に延びた淡墨の描線である。然るに他の多數の水墨作品を見ると、たとへば、宗達畫集收載の諸作を列舉するもいゝ、其の幾帳かの作品は多くは既に一種特異な様式化を明かに形成して、前者の犀利な自然の觀察に、飽くまで清鮮の滋嗜を湛へたるには比すべくもない。而も其の様式化すら、彼の裝飾的障屏畫の自からなるには似ずして、却つて形式踏襲の臭味を餘りに多分に具有する。若しまた其の款記を比較するなら、たとへば岩崎家藏、關屋瀞標圖（本誌第十號參照）のそれと、多數の水墨畫に見るものとは、不思議にも其の結體を類似せしめて居るが、而も容易に同一手と品定し難いものがある。たとへ其の印識に至つては、少數の例外を除いて、何れも直徑凡七糲七を有する所謂對青軒大圓印であることが、我々をしてまた一步退いて再び考慮を重ねしめる種となるのみである。然しこの種の例は已に伊年圓印に於て見たところである。こゝに我々は先づ一應是等の作品間に於ける時の先後をも考へて見なければならぬ。

三

宗達が嘗て伊年と號したことを事實として、養壽寺杉戸の宗雪伊

年（挿圖第一參照。本圖及挿圖第二は、元、前々號拙稿中、宗雪の條下に挿入すべきであつたが、寫眞を得るに至らなかつたが爲に、こゝに挿入することとする。幸に諒とせられたい）を考へるなら、此の宗雪が宗達の弟なると子なるとは第二として、其の制作時即ち寛永十四年以前に、既に彼が伊年號を宗雪に附與したと考ふべきである。同時に是を前提として當然彼の伊年繪は過去のものとなつたと考へなければならぬ。また彼の西行物語の跋記に光廣が宗達法橋と呼んでゐることを考慮すると、或は寛永七年以前に遡るものとする方が正しいに近いかも知れぬ。そは何れにするも、彼が一介の市井の畫徒として法橋位を贏ち得たこと、老後らしい宗達なる稱號とから、彼の宗達書きは當然伊年書きに次ぐものと解せられるが、是れに次ぐ法橋宗達書きと宗達法橋書きとの二種の款記の作品に至つては、先後果して何れであらうか。彼が時として法橋宗達と款し、また時として是れを逆に自署したと解することは、其の書體のそれ／＼に統一されてゐることに依つて到底考へ得ない。同時に其の畫蹟に就いて云ふも、たとへば水墨畫の多數が所謂宗達様式の漸次誇張され、形式化され、遂に畫體の縮小を伴ふに至つて居る跡を辿るなら、こゝにも當然宗達法橋書きの、より多く時後るゝものであることを考へなければならぬ。さればこそ嘗て史家はこゝに『くだけた署名ぶり』を見たのである。

既に今日に傳存する宗達法橋書きの多數を彼の後年の作品とする。こゝに我々の宗達繪に關する最も重要な一疑問が派生する。即ち其等多數の作品は果して世の所謂宗達其の人の遺品とすべきであらうかの疑問であるが、我々は不幸にして我々を否定的考察に導く記録

第一 宗雪筆 養壽寺杉戸繪

の遺存することを語らなければならぬ。それは山科道安によつて記された槐記の二條の記事である。即ち一は

享保十一年五月一日 近藤一葉邸御成

掛物 宗達墨繪の寒山

とあるもの、他は

享保十四年四月十三日 左馬頭宅へ御成

掛物 宗達墨繪ナデシコニ杜鵑

である。是等の二條の記事は讀まるゝが如く、近藤一葉或は左馬頭が、各、一夕自邸に豫樂院を請じた際の床の掛物を記録したもので、宗達の墨繪が當代好事者流の間に、たゞならぬ聲譽を得て居たことを語つて居る。然し彼が京洛の地に大手筆を揮ふた寛永の前後から、元祿に至る五旬の星霜の間、僅に雍州府志と人倫訓蒙圖彙とに、市井の俗流の間にのみ伍して、僅に其の名を留めたに過ぎなかつた宗達其の人が、偶、偉才光琳を其の追隨者中に見出してから、一躍大名を博し得たにしても、斯く豫樂院の如き有識の貴紳を迎ふべき宴席に飾られたと云ふ事實には、同時に其の半面をも考慮しなければならぬ。無論茲に謂ふ所の墨繪が、

果してどんな畫體のものであつたか、また如何なる款記印識を有して居たかも明かでないが、そは何れにするも、當時の貴顯の伴侶となるにしては、今日宗達法橋の款記を有する水墨畫の餘りに多いことに、多少の疑念を止め得ないであらう。我々は今日彼の墨繪の相等に多くを見て居るが、若し是れ等の數量を以て享保を測るなら、尙遙に多數のそれがあつたであらう。夫れにも拘らず彼等が一人ならず、二人までも、此の墨繪に依つて貴紳の前に誇らうとしたであらうか。或は少くも喜ばさうとしたであらうか。

是等の考察は我々をして、一面に宗達の墨繪が當代好事者流の間に相當に重貴されたことを推定せしめると共に、他面に今日の如く多數の作品があつたと想像し得ないであらう。加之、今日に遺存する宗達法橋書きの多數の畫蹟を精鑑するなら、其處に見る様式の固定化と、畫趣の窘縮とは、單に一人の宗達の前後兩様の畫體であらうと見んよりは、尙多くの時の介在を此處に想像して、時下れる作品であるとすべきであらう。云ふ意は即ち是等の墨繪の多數が、或は當代以降の何人かの所作でないかと疑ふことである。さればとて自分は今、是等の筆者を、最も我々の論據にとつて都合のいい、文會雜記の『今の宗達』に擬して、慌しい斷定を敢てしようとするものではない。其處にはまだ二三の疑問を解かなければならぬ。

問者の或ものは云はふ。その多數こそ所謂僞倣の作でないかと。既に同一の印を襲用せるさへあるに、其の款記の書體をも近づけると云ふことは、是れを贋僞の作とすることを容易に否定し得ない。

然しこゝには稍特殊な條件をも考慮すべきである。たとへば既に多

數の伊年繪は幾人かの伊年が、各自己の款記をも加へずに、畫印のみによつて此の流系の作品を公にして來たのである。宗達の弟と稱される宗雪既にさうであつた。又江戸時代に於ける雜派の畫匠に於ては、先人の畫印と款記を襲用せる例は必ずしも絶無とは云ひ難い。たとへば岩佐勝以の如きも、多少事態を異にするものがあるとしても、亦この見解によつてのみ勝以繪を考へる外はないと自分は信じて居る。其處には恐らく先人の聲名を利用せんとする多少の惡

第二 宗雪筆 養壽寺杉戸繪竹虎圖印記(原寸)

意を想像し得るにしても、尙單純な僞作とのみは考へ難い。殊に同一手に出でた宗達法橋繪の多數があることに依つて、是れ等を單に贋僞の作とするよりも、寧ろ他の宗達を想像することを正しいと考へ

たい。既に『宗達墨繪』が享保の好事者流の間に、ゆくりなくも聲譽を得た後に、文獻的にも嚴として『今の宗達』が存在するのである。

四

自分は前々號に、既に宗達の弟と稱される宗雪が同じく宗達法橋

の款記を襲用したかも知れぬことを想像して、其の畫蹟とも思はれるものを擧げた。そしてこゝに上述の法橋宗達對宗達法橋の問題に併せ考ふる時、また一の重要な疑問が派生する。それは初世宗達は果して絶対に宗達法橋の款記を自署しなかつたであらうかの問題である。

正直に云へばこの疑問は最近に至るまで他年自分自らをも悩まして、毎に狐疑逡巡、

一部の宗達繪に對せしめたものであると共に、毎に自分をして故人の惡戯も亦餘りに甚だしいものがあることを歎せしめた。それは明かに宗達法橋の款記を有しながらも、容易に初世宗達以外に其の筆者を擬し難い唯一の

作品が遺存するからである。それは云ふまでもなく、本誌に圖版とした熊谷直之氏藏、源氏物語關屋圖屏風である。

此の作品が曾て舊藏者別府氏の手を出で、から、多年親しく品鑑するの機會を失した自分は、此の唯一の作品の上に、漸く臆ろげに消なんとする記憶を辛くも辿つて、宗達繪に關する全般の疑念を集

中して來たのであつたが、最近再び品鑑するを得るに及んで、此の疑念は漸く氷解することを得た。豎九五糶二、横二七三糶四の金地小屏風の一隻に、見るが如く、例の『打出の濱來る程に殿は栗田山越え給ひぬ云々』の源氏物語關屋の一情景を寫したものである。恐らく當初一雙の屏風であつたものが、今は其の片隻を散逸して、僅に某かの公卿が、岩崎家本にも見た、切物見の八葉の車を、とある

路傍に立て、隨身、車副等の

（原寸）關屋圖落款 宗達筆 熊谷直之氏藏 第三第

人々が、牛をも放つて、しばし休らふ光景の一隻をのみ存して居る。其處には些かの背景もなく、たゞ一人の童形と、相對する官人とに全屏の中心を托するのみで、若し烏丸光廣の贊文微りせば容易に關屋の儚ない逢遭の情景とも考へ得ない程である。向つて左下隅には明かに宗達法橋の款記と、例の如き對青軒大圓印とを見る。個々の人物を組

立て、居る線描には、ともすれば多少の生硬を伴ふ點はあるが、而も轅に倚つて假睡せる牛飼童にも宗達を見るべく、路傍の石に蹲踞せる不思議な公卿の體様にも、却つて此の畫人の常途を超へた物數寄を見るであらう。朱土に群青を交へて、是れに白緑の苔蘚を加へた岩石の手法は尙更である。（因に云ふ。東京美術學校藏住吉家鑑

定控中に、嘗て酒井抱一が此の屏風を住吉家に齎して鑑定を乞ふた記録がある。即ち挿圖第四は、恐らく廣尙が記し留めたと思はれる控書中の見取圖の一部で、上部に、『立三尺一寸五分、ハ、一尺五寸、小屏風金地極彩色六枚折片シ、賛烏丸大納言光廣郷、繪俵屋宗達、賛古筆了意極有、宗達筆正筆ト申遣ス、文化十二亥八月十三日、等覺院抱一ヨリ來、右源氏物語之内關屋之卷也』の註記がある。是れより見ると抱一時代既に本圖の片隻が失はれて居たことが知られる。そは兎まれ、時幕末に下つて、衰へたりとは云へ、尙偉才抱一上人である。此の江戸初世の天才者の一名什を、こゝに留めしめたことは、餘りにも興味ある話題である。)

此の作品に關して嘗て多くの史家は、是れを以て無條件に宗達其の人の正筆として品鑑して來たやうである。然し嚴正な批判に終始せんとする或るものの間には、岩崎家藏有の同圖屏風に比しては、其の構想に於て既に稍平凡に、其の氣格に於て亦狹小に、其の上細部の描寫に於ても、一味の硬さを藏して、丰神流露の畫致に缺くものがあるが爲に、多少否定的見解をとるものも無いではなかつた。更にこゝに款記の問題を併せ考ふる時、一層肯定を困難とするものがあるが、然し其の款記は前々號所載の源氏物語圖屏風等に比しては、遙に宗達正筆の款記に近く、是れを以て到底異手の書蹟とは考へ難い。また其の構想と氣格とに於ても、たとひ等しく六曲屏にこそあれ、其の大小の差、同日の談に非ざるが上に、現時は不幸にして其の半を失ふて漸く一隻をのみ傳へて居ることをも考慮しなければならぬ。彼は或は今は無き他の一隻に、本圖に照應して彼得意の構想

を試み、環境を語る關屋の景物に、思ひも懸けず、我々觀者を眩目せしめるものがあつたかも知れない。たとへば岩崎家の名什にすら、落標圖に於ては、たゞ彼れ獨自の人物の去來と集散とに、超自然的な様式化を見る外は、寧ろ當代繪畫の常套な構想に終始せるが如きである。其の上最も消極的な徵證ながら、屏面の金箔の醍醐寺藏舞樂圖と一致し、約方九糎五左右を示すものであることも亦肯定的見解を有利に導くものである。(岩崎家藏本の金箔は明かでないから、こゝに比較することを避ける)其の上若し他の宗達正筆から暫く離れて本圖を精鑑するなら、此の巨匠を措いて何人が果して此の流麗艷美な畫態を遺し得やう。また誰人が果して本圖の作者に鈍重な宗雪以下を擬することが出來やう。

斯くして我々は、亦本圖の肯定説に左袒せざるを得ない一人となつたが、其れは同時に、容易く解し難い二種の款記の混亂をも肯定せざるを得ざるに至つたことである。彼は果して何の見る所あつて古來遺例なき宗達法橋の如き款記を加へたであらうか。其處には當代の弛廢せる世態を臚ろげに想像し、また彼が正系の畫史から離れて、市井の間に天稟の偉才を磨いた人であらうことを考定して、殆んど此の種の問題に無關心であつたとする外はない。そして『くだけた署名振り』に却つて宗達其の人の境地があらうとする見解におぞくも盲從する外はない。たゞこゝに最も奇異に思はれることは、若し宗達法橋の款記が彼の正筆の上にも見出されるなら、法橋宗達繪よりも時後るゝものとするが、より多く合理的であると思はれるにも拘らず、却つて光廣の題贊は尙彼一流の書風の完成に達し

て居ないことを仄かに感ずることである。果して前か、また後であらうか。そは姑く容易に解き難き宗達繪の謎とする。然し此の一遺品を除いて、宗達法橋の款記を有する作品中には、鑑して紛ふ方なき彼の正筆とし得るものは發見し難いことだけは明かにし得る。

五

自分は今、如上の重要な、而も容易に解き難い宗達繪の謎から一應離れて、こゝに一つの文獻を擧げて、他面から宗達繪の一角に觸れて見ることにしたい。それは何人にも幾回か讀過されたるべき、古畫備考所載長谷川左近の條(同書中卷九百二十六頁參照)の檜山坦齋の記の一節である。即ち長谷川左近筆、上宮太子守屋征伐圖小屏風に關して

去月嵩月老見て、其印を等木と讀被申候、(中略)其子豫見之、全く俵屋宗達の畫法にて、同じ時代なれば、疑くは宗達剃髮以前は長谷川左近と云しにや、さらに等伯風にては無之、古土佐の流也、只苗字を同くせる所より等伯の子か孫かと申事に聞ゆる也、等木とよみし印をよく見れば、左近と云字也、上の印は長谷川也、阮塘と嵩月老二度目に見に行き候時、同道いたされ、同意の由申され候と也云々

とある。また皇朝名畫拾彙は一層簡潔に

按今觀左近畫蹟與家法異而大似宗達筆意是變畫體如此耶或以氏長谷川妄以爲等伯系統亦未可知也

と傳へてゐる。自分の寡見は左近の畫蹟に就いて素より知る所なく、また先輩知己に質しても遂に得る所が無かつたが、本邦鑑畫史上に最も重要な位置を占め、また畫傳畫史上に劃期的な一線を太く引いた菅原阮塘、檜山坦齋、また其の背景には、偉才谷文晁の博覽をも有して居た一群の士の品鑑を傳へたる本記事は、輕々に觀過することを許さないものがある。これより見れば我々が漸く影本によつて窺知し得た、ボストン美術館藏、野馬牧牛圖屏風の左近繪と稱するものも寧ろ別筆と見るべきもので、宗達其の人の背後に、此の長谷川左近なる一畫師が、同一畫體の作を遺して居たと考ふる外はない。此處に我々の疑ふ所は今日左近の款記ある作品こそ目堵せざれ、宗達繪と傳稱せる無款の作品中に或は此の畫匠の遺品が潜むで居るのではないかと云ふ事である。こゝに仄かに想ひ浮ぶものは原邦造氏藏扇面散圖六曲屏一雙である。

此の屏風は既に宗達畫集及び圖華第四百八十二號等に收載され、また嘗て讀賣新聞社主催名寶展覽會にも出陳されて、多數の記憶にも新なるものがある如く、各隻に三十面の扇面繪を貼したもので、此の多數の作品の間には、土佐風の源氏繪とも云ふべきもの、また御物扇面散圖屏風に近い物語繪等の多數及び宗達風の濃彩草花繪、或は漢畫的手法を以てした禽獸繪の十數と共に、山水人物を材とする減筆の水墨畫の幾葉かを交え、別に純漢畫風の山水圖一葉を加へてゐる。而して宗達風の濃彩草花繪は云はずもあれ、土佐風の源氏繪なるものも人物の手法こそ宗達を想像するに難いが、金銀に墨を加へた特異な雲形の表現法は、宗達一派以外に求め得ない手法であ

る。また其の水墨或は淡彩の花木禽獸繪には宗達法橋書きの單幅中のあるものと頗る相類してゐる。是等各種の畫體は我々觀者に多大の興趣を感得せしむるに足つて居ると共に、また、各畫體に於ける細部の様式的類似は、本圖をして宗達繪と傳稱せしめた所以であらう。世の史家の見る所に據れば是等の多數の扇面繪は少くとも數筆に分類さるべきものとするが、自分は今其の問題に就いて云爲したくはない。また此の見解に同じたとしても、其の中に宗達の有無を説くことを避ける。然し其の或ものに何人も宗達其人を想像し難い手法様式を見ることに依つて、當然隠れたる某の畫匠を求むべきことだけはこゝに明に主張し得やう。而して上記の坦齋記に左近の畫蹟に於ける雪村風の手法を説いて居ることを見ると、たとひ其れが當代鑑賞家のさかしらであつたとしても、本圖水墨畫に多少の共通點なしとしない。自分は今本屏風中の或るものを左近其の人に擬せんには、餘りに畫匠に就いて知る所なきを自白しなければならぬが、然し此の種の無款宗達繪中に左近の如き畫人が或は潜在するのではないかと云ふ事だけを注意したい。文晁畫談にも亦云ふ

宗達に限らず光琳より以前に長谷川左近などいへる此流の名畫あり、落款なきもの宗達か光琳かにまぎるべき事なり。

六

自分の記敘は段節を追ふて漸く荒唐無稽の妄語に傾かうとする様

である。自分の意圖は今日の餘りに廣汎な宗達繪の範圍を出来るだけ狭めて、其處に再び宗達を検討して見ようとするに在る。此處に今一つ想ひ起さるゝは嘗て御物扇面散保元平治物語圖屏風を前にして、其の多數の扇面中に見る草花圖が、或は抱一あたりの補圖でないかと考へたことである。言ふ意は無論物語繪にまで及ばさうとするのではない。其の種の作品にあつては、各圖の構想に於ても、亦其の溫籍な、而も重厚な、時として輕妙洒脫な人物の個々の表現に於ても、是れを抱一あたりの仕事と見ることは到底容れないであらう。

由來本圖屏風は世既に周知の如く、種々の不可解の要素を有つて居る。それにも拘らず其の物語繪が宗達流系の他の畫人の、何人にも容易に擬し難いものがあるが爲に、多くの史家は是れを宗達其の人とするが、然し本圖屏風が近世の改裝を経て、一隅に見る伊年圓印すら、其の改裝上に鈴せられて居ることは云ふまでもない。従つて伊年圓印と扇面繪との間には些かの必然的關係は無いが、自分も亦其の物語繪の宗達説を容易に否定し得ない。然し近世的な構圖と手法とになつて居る草花圖が、同時に江戸初世の作であらうとは到底考へ得ないものがある。

かうして自分は嘗て本圖屏風を前にして、圖らずも抱一を想起したことがあつたが、最近東京美術學校藏、住吉家鑑定控の大冊を調査するに及んで、彼が琳派の作品の多數の贋作を作つて居たことを知つた。其の具體的な記敘に就いては、他日此の鑑定控の全容を解説する際に譲ることとするが、彼が琳派流系の一巨匠として、自ら

贋偽の圖本を作し、また彼の絶好の位置に依つて日常目睹した多數琳派作品を、常に住吉家に運んで鑑定を乞ふて居たことが、是の控書に依つて明にせらるゝに至つた。僅に今日に傳存した數ヶ年の此の控書には、幸にして彼が宗達寫或は宗達贋本を作つた記録はないが、然し彼が多數の宗達繪本の鑑定を乞ふて居る一面に、始興、何帛等の贋本を齎らして居る事實は、また同時に宗達繪或は伊年繪の贋本を作らなかつたことを容易に保し難いであらう。彼は人も知る如く當時の名流に生れたが、長じて風流韻事に耽り、紅燈綠酒の間に處して、常に身の窮迫を感じて居た證據もあるから、彼が斯く贋偽を作つたこともあり得やうが、同時にまた宗達繪或は伊年繪等に手澤を加へ、住吉家の鑑定を乞ふて是れを轉賣して居たことも想像し得る。

上來記敘する所、一は自分の單なる直觀であり、一は別種の文獻であり、無論此の間に何等の脈絡が無いことを自分は知つて居る。随つて今、自分は二種の事實を都合よく結んで、是れあるが爲に上記草花繪の抱一説を主張せんとするものではないが、然し今日所謂宗達繪或は伊年繪中に抱一贋本があり得ることと、また御物扇面散圖屏風の草花繪が少くとも、宗達其の人の正筆と考へ難いことだけを主張したい。

七

自分は上記屏風を機縁として圖らずも伊年繪に觸れた。宗達が法

橋宗達と款し對青軒圓印を鈐した以外に、伊年と號して其の圓印を用ひたことは、前々號既に酒井正吉氏藏、蓮池馬回圖を擧げて是れを認めた。元來此の伊年繪は、世人周知の如く、江戸初世より殆んど幕末に至る幾人かの畫師の作品を包容するもので、嚴密なる意味に於て宗達繪の範疇に説く必要を有たない筈であるが、夫れにも拘らず其の關聯する所尠からぬものがあるから一應の考察を加へよう。

前稿既に古畫備考に依つて、伊年を號した數家を擧げたが、其の内順定伊年、女重春伊年の二家に就いては全く知る所が無い。然し今日伊年印を鈐せる作品中、稍一家を想像し得るものは自分の見る所に依つても大約四家を數へる。即ち宗達、宗雪、相説等の文獻的にも既に明かな三家の外に、宗雪より相説に至る過程に、尙第三世無名氏伊年の一家があつたらしく思はれる。其上若し『今の宗達』が相説の晩年以後にあつたとすれば、彼も亦伊年繪を遺して居たであらう。是れと相類した關係を、自分の云ふ三世無名氏伊年と二世宗雪伊年との間にも繋いでゐる。即ち彼は或は宗雪伊年の晩期の作品でないかとも思はれるが、少くとも其の作品は様式的に寛永を下ること多年なると、其の作品の北陸地方に多く遺存することは注意に値する。

こゝに當然宗雪伊年の生存年代及び宗達、宗雪二家の血族關係にも疑問は及ぶであらう。即ち宗雪が宗達の弟であるか、或は二三の文獻が傳ふる如く、子であるかの問題にも及ばなければならないが、其れ等は宗雪の作品の尙明かでない今日、容易に考定し得ない。其の上美術史的にも殆んど重要な問題を提起しないが爲に、自分は是

れ以上伊年繪に一步を進めることを避けて、たゞ宗達所押の伊年圓印の襲用が、宗雪の早期の作品に了つて、以後の諸家は其の摸印を使用せるに過ぎないと思はれる事を注意したい。

今日一般的な意味に於て宗達として品鑑さるゝ伊年繪は、蓮池馬回圖を除いて其の殆んど全部が如上の數家の作品とすべきであるが、此處に尙三四の重要な作品を擧げなければならぬ。それは團家藏、光悅歌卷下繪四季風物圖（伊年圓印を鈐する）及び是れと一類の作品としての益田家藏、群鹿圖、大倉家舊藏、蓮花圖、または津輕伯爵家藏、蔦の細道圖六曲屏一雙である。

以上の内蔦の細道圖は御物扇面散圖の改裝上に伊年印を有せると相類して、是れは土坡の重厚なる補彩上に鈐されてゐる。また歌卷下繪の一卷に、伊年印を見ることにも多少の疑念が抱かれるが、其の秀拔な手法、たとへば蓮花圖卷に於ける蓮池馬回圖との共通の手法に於て、容易に爾餘の畫史を擬し難いものがあるが爲に是れを宗達正筆と鑑する外はないであらう。たゞ蔦の細道圖に至つては、其の層々と垂れ下る蔦葉の手法に目出度きものはあるが、宗達正筆に共通の手法を發見し得ざると、其の空疎なる構想とによつて寧ろ第二義的作品とする外は無い。

以上の外、尙伊年印を鈐せる水墨作品にして、容易く宗達其の人をも擬し難く、而も伊年を號した爾餘の諸家とも一致しない少數の作品がある。たとへば國華百一號所載、軍鶏圖軸の如きがあるが、是等個々の作品に就いて一々慌しい品定を加へることは寧ろ危険を伴ふものとして暫く第二義的宗達繪として鑑したい。

八

自分は上記薦の細道圖に依つて、偶、題贊ある作品に觸れたが、此の種の作品は正筆とすると否とに由つて、此の畫匠の生存期に觸るゝものであるだけ、尙數行の記敍を試みて置きたい。

元來宗達の歿年に就いては、去る大正二年なりしかに、金澤市寶圓寺内に其の墓所を發見し、また同寺藏『鬼薄典』に依つて、歿日を寛永二十年八月十二日と傳へて、當時の史家を驚かしたが、是れは尙無條件に信じ難く、今日に於ては寧ろ其の歿年を不詳とする外はない。従つて題贊を有する作品の如何に由つては、多少の上下を可能とする。其れ等の作品は寛永十五年に逝いた上記光廣の外、寛文元年を以て入寂した清巖宗渭の贊語ある鷹鷺圖軸（眞美大觀所收、法橋宗達款、對青軒圓印）があるが、清巖の贊文既に疑ふべく、畫格また初世の正筆として考へ難い。また山贊拾得圖（宗達款、伊年圓印）を三浦子爵家入札目錄に見るが、明かに贋偽の作である。尙正保中に他界した那波活所、一絲和尚等の贊ある作品があると傳へられて居るが、未見にして品第し難きを遺憾とする。

是れを要するに題贊或は跋記（西行物語の如き）及び光悅歌卷の如く、

彼此の相關的交渉に依つて、宗達其の人の事歴に觸るゝものは、今日尙光悅光廣の二人あるのみで、一も新な資料を提供し得るものを發見しない。

以上自分は餘りに冗漫な記敍を敢てし、また恐らく何人にも容易に解き難い三四の疑問を提起して、遂に宗達の周圍を徒に旋回することに努めたに過ぎない結果となつた。而して此の江戸初世の天才者の眞の核心を擲んで、宗達繪の様式に及び、美術史的意義を明にすべき最も重要な義務を逸せざるを得ざる結果となつた。然し彼の核心を成すべき個々の作品に就いては、今日既に定評あるもの多く、自分も亦他日再び稿を新にして、宗達繪の様式に就いて考へて見ようとして居るから、其れ等に就いては其の際に譲つて、今は當初の意圖のまゝに、人としての宗達にも、また其の作品としての宗達繪にも、今日の餘りに廣汎な、餘りに混沌たる範圍を出来るだけ狭めて、其處に先づ宗達の眞容を見んことを力むるに満足し、こゝに宗達に關する全般的な雜考を了りたい。

附記 前々號宗達雜考中に、自分は蘿月菴國書漫抄の『宗達といふは扇の繪かきにて古きものにて上手なり云々』の文獻を擧げたが、右は寶曆頃かと推定さるゝ水戸藩士和田莊太夫の筆録『異說まち／＼』に出づるもので、蘿月菴國書漫抄は同書より抄録したものと思はれる。こゝに是れを訂正する。